
曇り時々黄昏

宮夢露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇り時々黄昏

【Nコード】

N7255B

【作者名】

宮夢露

【あらすじ】

郡は過去には色々辛いことがあった…。それを立て直してくれたのが親友の竜城だった。黄昏ることが大好きで、女の子が嫌いな男、郡。この少年を中心とした恋あり愛あり悲しみあり笑いありのドタバタ学園ラブストーリー。

第一話 始まり始まり

黄昏たそがれるのは良いよ？

そりゃーだって……何も考えないでボーッとするのはなんだか心落ち着くしな。

最近はいつもいつも黄昏てますからなァ。

でも最近は少なくなってきた方だと俺自信そう思うぞ？

「よッ！なァ」に朝っぱらから黄昏モードなんだよ。」

彼の名前は藤崎ふじさき 竜城たつき。

クラスのムードメーカー（自称。タツキ曰くこれからそうなるらしい）で一年中馬鹿騒ぎしてるやつ。んでもって能天気。

「ほっとけ。」

そんで俺の名前は城ヶ崎じょうがさき 郡。

至って普通の一般人でありたい高校1年生。趣味は黄昏ること。ついでに加害者の能天気馬鹿による被害者でもある。

「お前……、なんでそんなに嫌な眼で見る……。」

「俺の眼がそうしたいからだ。」

俺はサラッとタツキの言葉を返す。

季節は4月。

俺と能天気馬鹿は、晴れて今し方高校生になった。

案の定、能天気馬鹿はすでに風紀委員に目をつけられている。

そして何故かオマケで俺の名前まで挙がっている……。

付いていけないよ……まったく……。

さっきまで雑談していたクラスから移動。

体育館で入学式をするそうだ。

俺たちは廊下に並ばされて会場に向かう。

それから20分。

長い長い、永遠に続くかと思われた老いぼれ校長のありがたアゝいお言葉を聞き終え、やっと入学式から解放される訳なのだが……ハア……。

決して予想したくないことが能天気馬鹿によって引き起こされた。

兎に角、説明すると長くなってしまうので難しいことは言わずにあえて簡単に纏めます……。

あのバツツカ野郎がとうとう風紀委員に喧嘩を売ったのだ。

案の定風紀委員は売られた喧嘩を買い、戦争勃発です……。

「おい！氷！」

「郡だ。何度言わせれば……。」

「そんなことはどうでも良い！」

人の名前をどうでも良い扱いする能天気馬鹿。

「手を貸……。」

「断る。」

全て言い終わる前に返す。

そう。

俺は連邦軍でもジオン軍でもないのだ。あえて言うならば一般市民？

「ならば何故一般市民だったア。口はガン。ムに乗った！」

そうきたか……。それだったら力。さんも……。ハ。トもそうだけどな。

「お前一人で十分だろ？風紀委員如き。」

ついでに言うのが遅かったが……、今私共はご察しの通り風紀委員との持久走中で御座います。

俺たちは幼稚園の時からいつも一緒に、遊ぶ時はいつも悪いことをしていた。

ま、俺はある程度落ち着きましたかね……。

こいつは止まらん訳ですよ…ハイ…。

そんなこんなで逃げているといつの間にか後ろからは風紀委員の
たちは追いかけてこなくなっていた。

「ああ…：…また俺の株価が急降下…：…。」

そう落ち込んでいる俺の元にタツキがジューズを持ってきた。

「気にするな！人生ポジティブシンキングッ！」

ああ…。久しぶりに俺の狩猟本能が…。なんてのは冗談で。

「いつもいつも俺を巻き込みやがって…。お前もそろそろ止め…：…。」

…。」

「次は何してやろうか…。そうだ！校長室に忍び込んでカツラを見
付けよう！」

またこいつは人の話を聞かないで…：…。

そんなこんなでドタバタスクールライフの始まり始まりイ…：…ト
ホホ…：…。

第二話 女嫌い

俺は毎日を普通に過ごしたかった。

だけどそんな夢い夢は叶わない。

タツキが何かをすれば俺までもが狙われるから。

いい加減…疲れたよ……。

只今昼休み…学校廊下で持久走中……。

「俺様を捕まえられるのはただ一人！城ヶ崎郡だけだ！」

「俺を称えるようなことを言うのは許そう…。しかし俺まで巻き込むなッ！」

「そんな堅いことを言うな！何だかんだで楽しいでわぁ～ないか！」
こいつと話すのは疲れる……。

俺はタツキと離れるべく、タツキと別の道を行った。

見事に俺はタツキ&風紀委員から逃れることに成功した。

「さて、昼飯にでもするか…。あいつらの持久走には付いていけない。」

教室に戻り鞆を取り、屋上に向かう。

途中にいろんな人に見られていたが俺はシカトする。

ホントは屋上は立ち入り禁止なのだが、前日にタツキに鍵を開けて貰っていた。

ここで昼飯を食べるために。

俺は賑やかなのは好きではない。

しかし嫌いでもない。

でもやっぱり静かなのは好きだ。

屋上のドアを開けると風が全身にぶつかってきた。

心地よい風。

「さてと……。」

俺は屋上のドアから真っ直ぐ前に進むとある、ベンチに腰を掛けた。なんでここにベンチがあるのかは謎だ。

鞆からパンを取り出す。

「このパン……もう買わない……。」

あまり美味しくなかった。

そろそろ予鈴が鳴るな……。

ガチャン……

閉めた筈のドアの音が聞こえた。

振り返ると初めて見る女の子が立っていた。

「あの……。」

「ん？」

「こんなところで何を？」

「昼飯。」

素っ気なく返す俺。

女の子はちよつと困った顔をした。

「それじゃ。」

俺は話したくなかった。

だって……。

俺は女の子の横を通り過ぎ、ドアへ向かう。

「あの……！」

何故か呼び止められる。

「なに……。」

少し怖く言っただけだ。

「あなた…城ヶ崎くんでしょ？」

知っけていても当たり前か…。

タツキとあんだだけ風紀委員に眼をつけられてるんだから…。

「だったらなに？」

「出来れば…お友達に…。」

頬を赤くして何を言うのかと思いきや…。

「無理。」

「どうして…？」

「俺…女嫌いだから。それだけ。」

女の子は顔を伏せた。

そして俺は屋上を後にする…。

放課後…。

「おい、郡。お前また女と何かあっただろ？」

勘が鋭いやつめ…。

「あア…。大したことはない。」

「大ありだ。もう少しくらい女にも慣れる。」

「無理な相談だ。」

そう…。

俺は女性が嫌い。

苦手とかそんな生易しいもんじゃない。

大ッ嫌いだ。

「お前…まだ引きずってんのか…。」

「いいだろ。タツキには関係ない。」

「大ありだッ！」

教室の中に居た人は俺とタツキを見る。

「あまり大声を出すなよ…。」

「俺にだつて責任が有るんだよ！だから…。」

「タツキは何も悪くない。俺のせいだ。だから…お前だけは忘れてくれ…な？」

タツキは物凄く悔しそうだった。

そしてタツキは教室から走り去っていった。

ありがとう…タツキ…。

と、俺は心の中で呟いた…。

第三話 初めての握手

「昨日は……悪かった…。」

タツキは昨日のことで落ち込んでいた。

「大丈夫。元気出せよ！俺は微塵も気にしちやいないから。」

「ホントにすまなかった…。」

大分重傷だな…。

「落ち込むのはお前のキャラじゃないだろ？はやく風紀委員にでも喧嘩売ってこいよ。」

俺はタツキに笑い掛ける。

「だから昨日のことはもうお終い！OK？」

「ああ…、解った！もうお終いだ！」

良かった……元氣を取り戻してくれて…。

昼休み。

「俺屋上行くから。」

タツキは前の授業で寝ていた。

こいつは頭がいいから問題はないけど。

「お？屋上？前に開けたんだっけか。うし、俺も行く。」

俺とタツキは屋上に向かった。

ドアを開けるとそこには昨日の女の子がベンチに座っていた。

「誰だ？あれ。」

タツキが不思議そうに女の子を見ている。

「またかよ……。」

「またってなんだ？まさか……昨日の女ってのは…。」

「ああ。あいつだよ。」

「あちゃー。うし…、ちょっと待ってろ。」

そう言つてタツキは女の子に走り寄る。

「ちよつとキミ。」

「ハイ？」

「こんな場所でなにしてんの？」

「人を待つているんです。」

多分その人つてのは俺のことだろう…。

「誰？その人。」

「いつもあなたと一緒に居る方です。」

女の子は笑っていた。

俺は溜息を吐き、タツキの元に歩いていった。

女の子は俺を見付けたのか、近くに走り寄ってきた。

「城ヶ崎くん…昨日は御免なさい！」

そう言つて頭を下げてきた。

タツキに眼を向けるところを睨んでいた。

解つたよ……兎に角怒らなければいいんだろ……。

「別に…。俺も…その……悪かった…。」

女の子は頭を上げるとニツコリ笑っていた。

「ちよつと…。」

タツキが女の子の方を叩いて屋上の隅に連れて行つた。

side 竜城

俺は女の子を呼び、屋上の隅に連れて行つた。

この子のことを俺はいろんな意味で知っていた。

それはこの子が……1年の中でずば抜けて可愛くて有名だったから。

「キミ…はなあか花丘 るり瑠璃ちゃんだろ？」

「そうですね…どうして私の名前を？」

そりゃ…だって……あなた有名ですから…。

「ちょっと耳にしただけ。…それとキミに協力して欲しい。」

「良いですけど…何を？」

「郡が女性を忌み嫌うのは知ってるだろ？」

「やつぱりそうだったんですか…私昨日振られちゃいましたから薄々気付いてたんですよ…アハハ…。」

「んな！」

郡が女ごとで何か有ったのかは知っていたが…まさか瑠璃ちゃんに告白されていたとは…。

やつも隅に置けないな…。

「あの…。」

「あ…悪い悪い。そんで続きなんだが…郡は容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群。完璧男なのだが…。ちょっと理由があつて女の子と話せないでいる…。それを治すためにあなたの力をお借りしたい。」
長々と彼女は俺の話を聞いて納得したのか、

「解りました！お力になりましょう！」

と言つて承諾してくれた。

「ありがとう。これでやつも少しは過去のことを…。」

「過去？」

「あ！いや何でもない。」

side郡

屋上の隅から竜城と女の子は帰ってきた。

「いんや、お待たせお待たせ。」

「先に飯にしていたから良いよ。」

俺はパンを嚙りながらタツキ達を見る。

「聞いて驚け…今日からお前を女の子と話せるようにするぞ！」

「遠慮しとく。」

即答する。

「郡……少しはお前も努力しろ。」

「勉強と体力向上の努力は毎日している。」

「ハア……とタツキは溜息を吐いた。」

「甘えたことを言うな。お前の我が儘もそろそろ限界があるだろう？」

確かに……最近女性から声を掛けられることがしょっちゅうある。

「逃げることでより立ち向かえよ……。な？」

能天気馬鹿らしいな……。

俺はフツと笑って、

「確かにそうかも……。少しずつだがやってみるよ。」

「それでこそ郡だ！んじゃ手始めにこの子の名前を聞きなさい！」
「言ってタツキは女の子を指さした。」

「そっぴや居たんだっけ。」

「酷いですよ！私のこと忘れないでください！」

女の子は怒りながら俺の胸を叩いている。

「そうだな……。」

俺もそろそろ覚悟を決めなくちゃな……。

叩いてくる腕を片手で止め、

「名前……教えて？」

「言って微笑む。」

女の子は頬を赤くして、

「花丘……瑠璃です……。」

そして俺は手を差し出した。

その手を瑠璃は両手で握ってきた……。

「これからも宜しくお願いしますね！」

「こちらこそ宜しく。」

こうして俺は異性と初めての握手をした。

第四話 郡の家

前に屋上で瑠璃と仲良くなった…。
までは良い。

しかし仲が良くなった途端、瑠璃は俺にピッタリと付きまとうよう
になってしまった…。

俺はまだ女嫌いは完璧に治っていた訳ではない。
だから正直ずっと一緒に居られるのはきつかった。

俺は人気のない場所にわざと足を運ぶ。

「なあ…なんでいつも俺のどこ来るわけ？」

「なんでって…嫌…ですか？」

瑠璃は少し上目遣いで俺を見る。

身長のせいなのかもしれないが。

「すまんが、俺はまだ女嫌いが治っていない。だからいつも俺のと
こに來られては少々困る…。」

すると瑠璃は少し涙目になった。

ハア~~~~~。

俺はこうゆう状況が一番嫌いだ。

女は涙をすぐに武器にしてしまうからだ。

だから男は謝ることしか選択権がないのだ

だが俺は違う。

俺はそこの男どもとは断じて違う。

女嫌いなからだ。

「ハッキリ言っておく。あまり俺にしつこくしないでくれ。」

そう言つと瑠璃は顔を腕で隠しながら何処かに走つていった。

「おい、郡。」

「んあ？」

「お前瑠璃ちゃんに酷いこと言つただろ。」

「あア。」

そう言つとタツキは大袈裟に溜息を吐く。

「お前なア……。女嫌いを治すんじゃないのか？」

「悪いがあんもやり方だつたら逆効果だぜ。」

「瑠璃ちゃんも自分なりにお前に協力してるつもりだったんだ。決して悪気があつた訳は無いはずだと思うぞ。だからせめて謝るくらいしてあげたらどうだ？」

タツキの説教に俺は負かされ、

「女の子には全員に優しくするんだぞ。」

の声を聞き流しながら、俺は瑠璃に謝りに行くことになった。

「さつきは言い過ぎた……。」

そう言つて俺は頭を下げると瑠璃は、

「大丈夫ですから！頭を上げてください。」

と言ひ、笑つてくれた。

その時、瑠璃の後ろから一人の女の子が近づいてきた。

「あれ？瑠璃ツチ、誰？そのイケメンくん。お友達かな？」

「あ！そくだよミツチャン。この人は城ヶ崎くん。」

俺つてからかわれてるのか……イケメンつて……。

「んな！あの城ヶ崎くん！？うわー！ちよつと瑠璃！私にも紹介しなさい！」

「嫌！ミツチャン城ヶ崎くん横取りしそうなんだもん！」

横取りつて……俺はあなたの物ではないのですが……。

「なに！？瑠璃と城ヶ崎くんって付き合ってるの！？」

なんで女はこう話の展開が速いのだろう……。

「っ！つつつ付き合ってたなんか……ない……よ？」

と言いながら俺を見る。

いや…俺に振られても困ります…。

「ほほオッ。ならまだ私にもチャンスが…。よし！それじゃ城ヶ崎くん！お友達になりましょう！これからは郡くんって呼んでもいいかしら？」

「ハ……ハア……」

この人と話すのは疲れる…。

「おっとそれより私の名前は松崎^{まつざき}美夏^{みか}よ。よろしく！」

と言って俺に手を差し出す。

その手を取り、

「城ヶ崎 郡です。よろしく。」

と言って笑いかける。

「城ヶ崎くん！私のこと忘れないで下さい！」

今まで静かにしていた瑠璃が口を挟んできた。

その時、教室から女の子が何人が寄ってきた。

「スマン！俺もう行くわ！」

「ウン。それじゃまた後でねエ。」

そして俺は自分の教室に走り戻った。

「ちゃんと謝り、さらに女友達を一人作ったことに拍手ウー！」

帰り際の下駄箱で、何処から見ていたのか、タツキはそんなことを話題にしてくる。

その時後ろから何か音が聞こえ、後ろを振り返ると、風紀委員がこちに物凄い勢いで走ってきていた。

タツキはそれにまだ気付いていなく、俺は即座に身を潜める。

不振にそれを見ていたタツキは状況を把握したのか思い切り走り出

した。

その追いかけてこを俺は暖かく見守りながら両手を合わせた。

俺は一人になった下駄箱で靴を履き替える。

「あ！郡くんじゃないか。」

後ろに立っていたのは、先ほど仲良くなった？女の子。松崎美夏が立っていた。

「美夏も帰りか？」

「初対面に近い女の子を下の名で呼ぶとは……なかなかやりますねエ。」

「それじゃ先帰るな。」

美夏の言葉を無視して俺は即座に立ち上がる。

「ああー！ゴメンゴメン！悪かったよ。」

「別に良い。」

「ねエ……一緒に帰らない？」

「スマンが俺はあんまし……」

「お願い！」

美夏は勢いよくに頭を下げた。

ここまで言われたら断るのが難しいな……

「ハア……。ご自由に。」

この言葉を聞き、美夏は頭を上げ笑顔でやった！と言った。

美夏とは家が物凄く近かった。

俺の家から徒歩30秒と掛からない。

「意外だったな。こんなに近いとは思わなかった。」

「そうだねエ。そうだ！今から郡くんの家に寄ってみてもいい？」

「別に良いけど……。期待するほどの物は無いぞ。」

「いいの！？ありがとー！私男の子の家に上がるのは初めてだから緊張しちゃうなア。」

ちよつと以外。この性格なら男友達とか多そうだと思ったからな。

いつの間にか俺たちは俺の家の前に立っていた。
学校からは徒歩20分程の距離だったがいっつもより早く着いた様な感じがした。

俺は鞆から鍵を取り出し、ドアの鍵穴に差し込む。

鍵が開いた音がして、俺はドアを開ける。

「どうぞ。」

「おっじゃまっしまア〜っす!」

美夏が勢いよく家の中に入っていく。

その後を俺は着いていく。

すると美夏は、

「郡くんの部屋見せてよ!」

とか言い出した。

別に俺の部屋には変わった物は無い。

俺は美夏に部屋を案内し、俺の部屋のドアを開ける。

「ヘエ〜。思った通り綺麗にしてるねエ〜。いや…想像以上かな…。」

「

「どうも。」

「そう言えば郡くんの両親は?」

それは、郡には言っではならない言葉だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255b/>

曇り時々黄昏

2010年10月21日22時02分発行